

from NUMO

こんにちは! NUMO(原子力発電環境整備機構)です!

NUMOは、原子力発電所の使用済燃料をリサイクル(再処理)した後に残る高レベル放射性廃棄物などを、私たちの生活環境から安全に隔離するため、地下300mより深い安定した地層内に最終処分(地層処分)する事業に取り組んでいます。

今後、国は、高レベル放射性廃棄物の最終処分について、日本の地下環境など

の科学的特性を客観的に表す全国地図(科学的特性マップ)を示し、国民の皆さまの関心と理解を深めていく方針です。

これを受け、NUMOでは、国と共催で全国シンポジウム「いま改めて考えよう地層処分～科学的特性マップの提示に向けて～」を9都市で開催し、マップの提示を契機としてどのような取り組みを進めていくべき

かなどについて、参加者の皆さまから多くのご意見・ご質問を頂戴しました。これからも皆さまとの対話を大切に、地層処分の実現に向けて取り組んでまいります。



from 日本原燃

ウラン濃縮工場の事業変更が許可されました

日本原燃株式会社は、青森県六ヶ所村において、原子燃料サイクル施設(再処理工場、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理セ



ウラン濃縮工場

ンター、MOX燃料工場、ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物貯蔵センター)を展開しています。

当社は、再処理工場、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター、MOX燃料工場、ウラン濃縮工場の4施設について、2014年1月に新規基準の適合性審査を受けるための事業変更許可の申請を行ってまいりました。

17年5月17日、ウラン濃縮工場が許可を頂くことができました。

今後は18年12月までに、耐震設計の強化や重大事故などの拡大防止対策による安全性向上に向けて、設工認申請手続き、工事に取り組んでいくとともに、24年度までに新型遠心機への更新などにかかる工事を完了させる予定です。



ツカモトモ・ツカエルくん

また、再処理工場、高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター、MOX燃料工場につきましては、17年3月までの審査会合において一通りの説明を終えております。

当社は、新しい安全の姿をつくり上げるという信念の下、引き続き全社を挙げて万全の体制で取り組んでまいります。

お耳を拝借

食の境界線

“玉子サンド”と“食パン”の東西

玉子サンドといえば、今全国的に「厚焼き玉子サンド」が大ブーム。皆さんはゆで卵派? それとも厚焼き玉子派? ゆで卵をみじん切りにしてマヨネーズとあえるのが東の定番ようですが、西の具はちよっと違います。関西の喫茶店が出てくる玉子サンドの中身は、出汁巻き玉子のようなふわふわ厚焼き玉子です。これが食べてみると、何とも優しい味わい。

さて、サンドイッチに使われている食パンの好みも、東と西では違いがあるようです。スーパーやコンビニの売り場を見ると、東は6枚か8枚切りがほとんど。一方、西に行くと、5枚切りが圧倒的に目立ちます。ちなみに、筆者の幼少の頃は4枚切りのトーストが日常でした。これを分析すると、東日本がパリッとした食感を好むのに対し、関西はたこ焼きやお好み焼きなどの“コナモン文化”に代表されるようなモチっとした食感が支持されているからでは? とのこと。皆さんの地方ではいかがですか?



JAIF地域ネットワークノムリエ

編集後記



今年度より、リニューアルした「JAIF TIMES」をお届けします。

今号は4月の年次大会時に行われた「JAIF地域ネットワーク第16回意見交換会」の様を中心に、第50回の節目の開催となった「原産年次大会」や「松江エネルギー研究会」さまのご紹介・活動報告などを取り上げました。「JAIF地域ネットワーク第16回意見交換会」は、講師の熱のこもった講演とメンバーの熱い思いが交錯し、誌面にはその全てを掲載できておりません。

誌面作成に当たりご協力いただいた皆さまには、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。皆さまの活動に役立てていただけるような内容を目指して頑張りますので、ご意見など、どんどんお寄せください。これからもよろしくお願い申し上げます。(ノムリエK.S.)

JAIF Regional Network TIMES

人をつなぐ・地域をつなぐーいっしょに明日の原子力を考える

2017年6月 Vol. 4

福島をいまを伝える



Report 01

福島アンバサダープログラム(福島大学)、JAIF地域ネットワーク第16回意見交換会の模様

JAIF地域ネットワーク 第16回意見交換会概要

原産協会JAIF地域ネットワークでは、4月12日(水)に「第16回意見交換会」を開催しました。今回の意見交換会は、福島大学 国際交流センター ウィリアム・マクマイケル副センター長に、福島における風評被害の状況と正しい福島の現状をご講演いただきました。また、福島の風評被害払拭に向けて、ご自身が取り組まれている情報発信活動において大切にされていることやご経験を伺うことで、今後どのような取り組みが必要か意見交換を行いました。

意見交換会は、国内各立地地域および消費地のメンバー18名他、電力会社など総勢32名が参加し、マクマイケル氏の熱のこもった講演に耳を傾け、メンバーからは活発な意見が出されました。3時間近くに及んだ意見交換会は他人事ではない“福島の現状”を共有することで終了しました。

第16回 意見交換会

講演概要

●自己紹介

- カナダ・バンクーバー出身
- 自他共に認める「カナダ人の福島ファン」
- 福島の新渡戸稲造を目指して、情報発信に努めている

●現在の情報発信活動について

- 海外では、一流といわれているメディアでさえも、いまだに間違った報道や過剰報道が行われており、そのため福島の負のイメージが固定されてしまっている
- 福島を伝えるコミュニケーションスキル、パッションなどを持った人材の育成が必要
- 福島アンバサダープログラムを2012年春から開催し、過去10回で、留学生132名と日本人学生400名以上が参加している
- 「福島の見える化」「確信を持った核心への攻め」「一般人の受け入れ体制の強化」が今後の課題

●福島を伝える際の心掛け

- 「分かりにくい」を「分かりやすくする」ナビゲーター役であること
- 「止まった時計」を動かすために、包括的に時系列で丁寧に説明する
- 透明性を重視し、福島で何が起きているのか、アンテナを張ること

●福島の見せ方について

- 福島を数字だけで語らない。データとエピソードをリンクさせる
- “百聞は一見に如かず”。しかし、事前の説明など、視察前の土台づくりも必要である
- 説明は地元の当事者の言葉で

●福島の伝え方について

- “八方美人”な情報は、かえって逆効果
- “5歳児”にも分かるような説明を心掛ける
- 聞き手に判断を促すことが重要



講師
ウィリアム・マクマイケル氏
福島大学 経済経営学類 助教
国際交流センター 副センター長

カナダ出身。2007年に国際交流員として福島県に来日。10年からは福島大学に採用され、海外校との協定や海外向け短期プログラムの計画など、福島大学における国際化推進業務に携わっている。



マクマイケル氏が目指している
新渡戸稲造

JAIF地域ネットワーク メンバーの活動紹介

松江エネルギー研究会

代表:石原孝子 設立:2004年10月 松江市

市民の立場でエネルギーや原子力問題を考え、「良い」「悪い」という判断ではなく、「正確に知ろう」を提唱し、勉強会や講演会、学生とのコラボレーションを中心に活動中です。島根県の大学および高専の学生を対象とする放射線・原子力関連の視察など、次世代教育にも力を入れています。

●2016年度の主な活動実績

9月12~14日、「百聞は一見に如かず」を目的に、原子力関連施設の視察勉強会(東海村、東京)を実施しました。参加したのは、島根大学・松江高専、松江市民など20名です。また、視察後の17年1月には、参加した学生による「ゼロから始めるエネルギーの話」と題する視察体験発表会を開催しました。それぞれ感じ方が違い、これぞ「百聞は一見に如かず」。学生の底力とパワーを感じる、素晴らしい発表会になりました。



東海村
原子力科学館見学



日本原子力発電(株)
東海第二発電所見学



JAIF若手研究者
との交流



視察体験発表会
イベント
膨張確認実験

当日の 意見交換から

Q1 福島大学 国際交流センターが、『福島を伝える』情報発信活動の一環として実施している「福島アンバサダープログラム(以下FAP)」では、どのような活動を行っているのですか?

A1 年に2回、海外の学生交流協定校より短期留学生を招き、福島の復興に関するさまざまな実践学習を通して、参加学生が東日本大震災の被害の実情や、世界的に有名となった「FUKUSHIMA」の現状を学び、福島の魅力や実情を母国で伝えてもらう体験型被災地学習です。
※参考 <http://kokusai.adb.fukushima-u.ac.jp/program.html>

Q2 福島の現状について勉強し伝えていきたいと思いますが、一般向けのFAPのようなネットワークはないのでしょうか?

A2 語り部事業のネットワーク化など、徐々に整備が進み始めていますが、現状では、受け入れ窓口が少ないことが課題になっています。今後も受け入れ体制の強化が必要です。本学の「うつくしまふくしま未来支援センター」では、楢葉町・広野町・富岡町の3町と連携して、企業人向けの受け入れ窓口をつくらうと準備を進めているところです。

Q3 海外でのメディアの発信情報は、いまだに正確なものとはいえない状況だと思えますが、そんな中で私たちが正しい情報をつかむにはどうすればいいでしょうか?

A3 地道ですが、一人でも多くの理解者を増やしていくことだと思います。例えば、ボランティアで現地に入り、ネットワークをつくるというのも一つの手段です。

Q4 正確な情報が発信されない結果、現状では、福島への理解が進まず、風評被害やいじめ問題につながっていると思えますが、どのようにお考えですか?

A4 正確なデータに基づき、見識のある方々からの発言が重要だと思います。また、情報を正しく選別できる人材の育成が必要でしょう。そのためには、まず子どもたちに、きちんとエネルギー教育ができるような環境づくりが大切です。

Q5 エネルギー教育を行っていくためには、どのような環境づくりをしていけばいいのでしょうか?

A5 現在は各教員の裁量に委ねられているエネルギー教育を学習指導要領などで定め、子どもたちが義務教育期間中に受けられる体制をつくるのが大切ではないでしょうか。そういった体制の中で、福島のことやエネルギーのこと、原子力のこと、最終処分地のことを語る人材を育成していくことが重要課題であると考えます。

お知らせ

福島第一原子力発電所事故後、日本では、マスコミの誤った報道やデータの裏付けがないものを検証し、正しい情報を通報する機関「日本報道検証機構(通称:GoHoo)」が設立されました。
(参考 <http://wanj.or.jp>)

第50回 原産年次大会

開催報告



日本原子力産業協会 会長 今井敬

2017年4月11、12日、東京国際フォーラム(東京)において、「いま、過去を未来へ結ぶ」を基調テーマに第50回原産年次大会を開催しました。国内外から原子力関係者、一般市民など890名が参加しました。

第50回となる本大会は、半世紀の歴史を振り返り、現在の原子力を取り巻く課題を直視した上で、世界そして日本の将来のために、課題をどのように克服し、将来世代が夢を持って取り組んでいける原子力とはどうあるべきなのか、未来を展望し夢や期待を語る大会となりました。

当協会の今井敬会長は所信の中で、第1回が開催された1968年当時から2000年代の原子力カルネッサンス、福島第一原子力発電所事故後の原子力を取り巻く状況を振り返り、一貫してエネルギー資源の大部分を海外から輸入する状況を踏まえ、エネルギーの安定供給における準国産エネルギーである原子力の重要性はいささかも変わらず、地球環境問題に関する国際約束も原子力なしに達成は不可能だと明言した上で、原子力産業界が国民の信頼を回復し、一致団結して難局を乗り越える必要性を訴えました。

(参考: <http://www.jaif.or.jp/50th-annual-conference/>)



「若手特別セッション」
国内外の原子力産業や学業に従事する若手らが、原子力の将来展望や原子力を活用した将来に対する夢を語り、そのために自分たちに何ができるか、何が必要かについて議論した



福島物産展を併催